

第二百五十五話 日本人の有能さ・勤勉さ・誠実さの証明

留用全般については、当メモランダム「第七十四話 建国と友好に寄与した被留用日本人」を参照して頂きたいが、具体的な活動については割愛していたので、本話で紹介したい。留用日本人が如何なる活動に従事させられたのかをインタビュー記事を中心にまとめた「留用された日本人」、「日本人だけが知らない終戦の真実」、その他 net 情報を参考にした。

1 鉄道技術者



当時の満鉄は、技術者の宝庫であった。終戦直後はソ連軍の承認を得て鉄道事業団を設立して駅構内の作業に従事していたが、代わって共産党軍が実権を掌握するや、帰国の念願もかなわず、共産党軍に『留用』された。留用された技術者たちは各地で鉄道の修復作業に当たった。国共内戦に伴う作戦上の必要性から修復路線等が指定された。朝鮮戦争が勃発するや、更なる作業が命ぜられ、彼らの望郷の念は微塵に砕かれた。彼等に更なる試練が待ち受けていた。石油輸送のための鉄道路線の建設である。場所は辺境の地であるシルクロードの交通の要衝甘粛省「天水」である。天水に送られたのは約 200 人である。この地で約千日に及ぶゼロからの鉄道建設であった。未熟な現地人労働者と共に、困苦欠乏に耐えながらも、子弟教育もしっかり行うなど彼らの絆は日本帰国後も天水会に結実した。1952 年 10 月 1 日天蘭線(天水～蘭州 348 km)が完成し、毛沢東から祝電が届いた。

2 医療関係者

留用された者の中で最も多かったのが医療関係者であった。医師、看護婦、傷病兵を運ぶ担架係など、およそ 3 千人が「留用」され、共産党軍と共に行動した。時には国民党軍の攻撃を受け、前線手術隊から野戦病院への負傷兵搬送を担う担架隊は、衛生隊の中でも危険度の高い任務であった。彼等は、部隊の移動に伴い、移動せざるを得ず、一万キロに及ぶ行軍もあり、未知の風土病や新たな疫病にも遭遇した。

3 飛行隊の留用

共産党軍の致命的な欠落は空軍部隊であった。各部隊は状況に応じて最善の方途を取れとの指示を受けた関東軍第二航空団第四錬成飛行隊、林弥一郎少佐以下(三百数十人)は帰国の道を探るべく集団行動をしていたが、誤って共産党軍に投降・捕虜となった。共産党軍林彪等の要請を受けて、条件付きで、共産党軍の空軍建設に協力することとなった。日本に帰るのであればその道しかないとの想いであったという。日本軍機の回収・改装、所要の資器材の収集を行い、パイロットの養成や整備員の養成の準備を推進した。

国共内戦の激化に伴い、拠点を移動せざるを得ず、苦心惨憺のうえ、1946 年 1 月 1 日通化で航空学校が発足した。後に牡丹江に移転。燃料の確保にも苦労した。半年後から飛行訓練が開始された。1948 年中国人パイロットの操縦で単独飛行が行われた。10 月、空軍誕生。19 機の編隊が天安門広場上空に飛来し晴れ姿を披露した。

彼らの任務は終了したが、朝鮮戦争が勃発し、日中両国の国交も断絶しており帰国は絶望的となった。1953 年帰国が始まった。

4 日本資本の工場や施設の稼働に従事した人々

○鞍山製鉄所 ソ連→国民党軍→共産党軍と接收された。

○炭坑や開墾作業 等々

5 雑感 ○国民党軍と共産軍の対応の差 ○留用に関する謝罪・感謝の念の表明は

○否応もなく、留用 ○現地でも帰国後も苦難の連続 ○国際政治に翻弄

○帰国後の謂われなき誹謗中傷多々 ○日中友好への寄与 ○敗戦国の国民保護の無力さ痛感 ○望郷の念は消え難く ○留用者の様々・複雑な思い ○留用の全体像の解明

(了)